

聖書：ヨハネの黙示録 1：5b～8

説教題：見よ、その方は来られる

日時：2020年11月8日（朝拝）

今日は1章5節後半から8節までを見て行きます。次回の9節から、この書は本論に入ります。ですから今日の部分までがこの書の序論になります。本においても、音楽においても、「序」に当たる部分は、その後の本体部分の導入の役割を果たし、特にその後に展開される部分のエッセンスが凝縮されている場合が多いと思います。あるいはその後を読み解くためのカギが示されている場合が多い。この黙示録の序もそうです。そういう意味で、大切なことがここにあると受け止めて今日の箇所も見て行きたいと思います。

前回、この書が記された時代背景について述べました。それは1世紀末の紀元90年代、第11代ローマ皇帝ドミティアヌスによる迫害の時代であったと。キリスト教迫害で有名な第5代皇帝ネロよりもひどい暴君が治めた時代です。ですから信者たちにとって、教会にとって、信仰に生きるのが困難な時代でした。救い主を信じたのに良いことが何も起こらない。かえって信者であるため、状況は益々難しくなっている。身の危険も感じる。そんな中、教会を揺さぶろうとする偽りの教えも説かれていました。またこの世と妥協して生きようとする誘惑にさらされていました。そんな中、ヨハネは神から受けた幻を通して、私たちが持つべき天の視点についてこの書に書き記しています。特に神がキリストにおいてなさってみわざに基づいて、この世界をどういう目で見るとすべきか、またこの世界の歴史はこれからどこへどのように進んで行くのかを。その視点に立つことこそ、この書を読む者の幸いであり、クリスチャンの幸いであるということです。

前回、ヨハネはこの書の執筆人また宛先を記した後、三位一体の神から恵みと平安があるように！という最初の祈りを記しました。その最後に出て来たイエス・キリストを受け取る形で、5節後半からまずキリストへの頌栄・賛美が記されます。この黙示録には賛美や礼拝の言葉がたくさん出て来ますが、その最初のもので。そしてここにはキリストに信頼する者たちはどういう者たちとされているかが天の視点で記されています。

まずこのキリストについて、この方は「私たちが愛し」とあります。この「愛する」という言葉は現在時制で記されています。つまり今日もキリストは私たちが愛しておられる。私たちは誰かと言えば、キリストに今日も、今も愛され続けている者たちです。迫害や困難の中で、まずこのことを受け止め、感謝することが私たちの力になることです。そしてこれは単にセンチメンタルなもの、感情的なものではありません。キリストの私たちへの愛は明確に示されたことがすぐ続いて述べられます。すなわち「その血によって私たちが罪から解き放ち」と。すぐ分かりますように、これはイエス様の十字架における私たちのための身代わりの死を指すものです。イエス様はその出来事において、私たちへの限りない愛を明確に示されました。ヨハネの福音書 15 章 13 節：「人が自分の友のためにいのちを捨てること、これよりも大きな愛はだれも持っていません。」

そしてこれによって私たちが罪から解き放ってくださいました。それまで罪の奴隷状態にあった私たち、罪の力の下にがんじがらめの状態にあった私たちを、そこから解放してくださいました。その結果、今や私たちは今やどんな地位あるいは身分を与えられているかというのが 6 節です。ここに私たちは今や神に対して「王国」また「祭司」とされたと述べられています。これは旧約聖書から言われてきたものです。出エジプト記 19 章 6 節：「あなたがたは、わたしにとって祭司の王国、聖なる国民となる。」これはエジプトの奴隷状態から、あの過越の子羊の血をもって贖い出されたイスラエルに向かって神が語られた言葉です。彼らが贖い出されたのは、彼らが神にとって「祭司の王国」となるためであると。ここに「王国」という言葉と「祭司」という言葉の両方が出て来ています。そしてこの箇所と合わせて考える時にはっきり浮かび上がることは、あの過越の子羊の血が指し示していたものは、今 5 節で見たキリストの血であったということです。キリストこそ、旧約の過越の子羊が指し示して来た、まことの神の子羊であるということです。

さて「王国」とは何でしょうか。王国とは神を王とする国のこと、またその国民のことです。神は復活させたキリストを今、ご自身の国の王として立てています。5 節でキリストは「地の王たちの支配者」、すなわち王の王であると言われました。そのキリストのもとで、私たちは今や神の国の国民とされています。別の言葉で言えば、ピリピ書 3 章 20 節が言うように、私たちは今や天に国籍を持つ天国人であるということです。また、ここでは詳しく述べませんが、私たちは単にこの王国に属

する一人とされたばかりでなく、キリストと結ばれて、キリストの王権にともにあ
ずかる者、ともに治める者となるということが、の後、言われて行きます。2章26
節：「勝利を得る者、最後までわたしのわざを守る者には、諸国の民を支配する権威
を与える。」 3章21節：「勝利を得る者を、わたしとともにわたしの座に着かせ
る。」

もう一つ「祭司」とは何でしょう。祭司とは神に近く仕える人です。今、私たち
はキリストにあって罪を赦され、きよめられ、大胆に神に近づくことのできる者と
されました。神のみそばで礼拝生活をささげる民とされました。そして祭司は自分
が神に近づくだけでなく、他者のためのとりなしをする人でもあります。イスラエル
が祭司の王国と言われた時、それはイスラエルが全世界の民に神の救いを
取り次ぐ者となるという意味も含まれていました。イスラエルが特別な民として選
ばれたのは、他の国々の上に立って誇り高ぶるためでなく、むしろ他の国々に神の
光を証しし、他の国々が神に近づく者となるための祭司的役割を果たすためでした。
ですからペテロの手紙第一2章9節では、新約の教会のことが旧約聖書の用語をそ
のまま用いてこう言われています。「しかし、あなたがたは選ばれた種族、王である
祭司、聖なる国民、神のものとして選ばれた民です。それは、あなたがたを闇の中から、
ご自分の驚くべき光の中に召してくださった方の栄誉を、あなたがたが告知らせ
るためです。」 ヨハネはキリストの尊い犠牲的贖いによって与えられたこの恵み
を思い、この方に栄光と力が世々限りなくあるように！アーメン！と頌栄をささげ
ます。私たちもまた自分が導き入れられたこの特権を思って賛美をささげるべきで
す。

そしてさらに私たちの将来には偉大な日が待っているというのが7節です。まず
7節前半：「見よ、その方は雲とともに来られる。」 この言葉も旧約聖書の言葉を
下敷きにしています。その言葉はダニエル書7章の言葉です。このダニエル書7章
もヨハネの黙示録と深い関係にあります。ダニエルはここである夢と幻を見ます。
それはイスラエルがバビロンへ捕囚されて行った後、そのバビロンの最後の王の時
代のことです。2節以降を見ると、その幻においてまず4頭の大きな獣が海から上
がって来ます。第一のものは獅子のようで、鷲の翼をつけた獣。第二は熊に似た獣。
第三は豹に似た獣。そして第四はさらに恐ろしくて不気味で非常に強い獣です。こ
れらは17節以降の解き明かしの言葉から、4人の王または国を指していることが分

かります。つまりダニエルが見た幻とは、世界の歴史は獣にたとえられる国々が争い、互いに打ち負かし、自らが支配者になろうとする歴史であるということです。次々に王や国家が現れて、天下を取ろうとする。そして単なる繰り返しと言うよりも、一層悪く、凶暴な方向へ変化する。特に第四の獣はこの上なく誇り高ぶり、未恐ろしい力を持ってこの世を我がものにしようとします。しかしその幻の中で9節以降に、天における神の御座の光景が映し出され、その方の前で起こるさばきのことが描かれます。11節には先のあれほど恐ろしく、大言壮語していた獣があつという間に殺され、燃える火に投げ込まれる様子が描かれます。そして13節にヨハネが下敷きにした言葉が出て来ます。そこに「人の子のような方が天の雲とともに来られた」という光景が示されます。そしてその方に主権と栄誉と国が与えられ、この方こそ王の王であり、その国は過ぎ去ることのない永遠の国であるとされます。ヨハネはこの言葉をもとにして、あのダニエル書の預言の成就として、イエス・キリストはやがてまことの王として再臨されるのだと1章7節で言っているわけです。ちなみに第三版まで「雲に乗って」と訳されていた言葉は、新改訳2017になって「雲とともに」となっています。原文もそうです。「雲に乗って」と訳すと、まるで孫悟空が雲に乗って飛んで来るかのようなイメージになってしまいます。雲は聖書では神の栄光ある臨在の現れとして用いられています。ですからイエス様は「雲に乗って」と言うより、「雲とともに」来られるのです。他の箇所では「雲のうちに」という表現になっているところもあります。イエス様は神の栄光とともに、あるいは神の栄光に包まれて再び来られるのです。

さて今のダニエル書の元々のメッセージを考慮に入れると、黙示録1章7節のメッセージは一層はっきりして来ると思います。ダニエルのいた当時、世界の支配者はバビロンでした。その後、色々な国が入れ替わりに支配者になり、治める者たちははいよいよ高ぶり、凶暴になって行きます。しかしその高ぶる者たちは突然倒され、神が立てたまことの王に取って代わられます。ヨハネの時代も恐ろしい王が支配していました。信仰に生きる者たちには多くの困難がありました。しかしその目に見える現実を打ち破って、神が立てたまことの王が来られるのです。あの恐ろしい獣があつという間に殺され、火に投げ込まれたように、目の前で高ぶる終末の獣も必ず時が来て倒され、まことの王による平和の支配に取って代わられるのです。神が必ずそのようにされるのです。

7 節後半には「すべての目が彼を見る。彼を突き刺した者たちさえも。地のすべての部族は彼のゆえに胸をたたいて悲しむ。」とあります。こちらはゼカリヤ書 12 章 10 節を下敷きにした言葉です。そしてイエス様ご自身、そのゼカリヤ書と先に触れたダニエル書 7 章を組み合わせてマタイの福音書 24 章 30 節でこう言っておられました。「そのとき、人の子のしるしが天に現れます。そのとき、地のすべての部族は胸をたたいて悲しみ、人の子が天の雲のうちに、偉大な力と栄光とともに来るのを見るのです。」 ヨハネはここで「すべての目が見る」と言っています。キリストの再臨は一部の人だけが分かる秘密の出来事ではないということです。その日になれば瞬時にして全員が分かるのです。ここでの「突き刺した者」とは、先のイエス様の言葉から考えて、イエス様に反対した人たち、逆らった人たち、イエス様を退けた人たちを指していると考えられます。その人たちはやがての日に嘆くのです。なぜでしょうか。それは自分たちはもはや救われないと知るからです。自分たちが退けて来たイエスこそ神が立てたまことの王、唯一の救い主であるとはっきり知るからです。そしてその方信じなかった自分たちには恐ろしいさばきが臨むことになる。キリストの再臨は大いなる救いの日であると同時に大いなるさばきの日でもあります。この日こそ神の正義は実行され、キリストにより頼んで歩んだ者はすべての涙を拭い取られて、永遠の天の御国に最終的に入る日となります。そのことを思って、ヨハネは「しかり、アーメン！」と言うのです。

最後の 8 節は、今述べたことは確実であるということの確証です。このプロローグの最後で今一度大事なことが強調されています。原文で先に書かれているのは「わたしはアルファであり、オメガである」という言葉です。原文の順番通りに 8 節を訳すところになります。「『わたしはアルファであり、オメガである』と神である主が言われる。今おられ、昔おられ、やがて来られる方。全能者。」 アルファとオメガは、新約聖書が書かれたギリシャ語アルファベットの最初と最後の文字のことです。黙示録の 21 章 6 節には「アルファであり、オメガである」という言葉がもう一度出て来て、そのすぐ後に「初めであり、終わりである」という言葉がついています。ですからここも同じ意味であると言えます。これは神こそ初めから終わりまで一切の主権を持つ方であるということを行っているものです。この世界は偶然に始まって、どこへ行くのか誰も分からないというものではありません。この世界の始まる前から神はおられて、またその終わりに至るまで、神がすべてを支配し、導いておられます。その神について、4 節で見たのと同じ言葉がもう一度繰り返されています。

す。すなわち「今おられ、昔おられ、やがて来られる方。」 神は初めと終わりばかりでなく、今日もおられる方です。昔も今も将来もすべてを支配し、すべてをご存知で、今日も私たちの上であってすべてを導いておられます。そしてその方が最後に「全能者」と言われています。第3版までは「万物の支配者」と訳されていました。この言葉には「力」という意味と「支配」という意味の両方のニュアンスがあるようです。神はこの力と支配をもってすべてを治め導いている方です。歴史はこの方の御手に完全に握られています。ですから7節の日は必ず来るのです。そしてこの8節の宣言のもとで、以下のヨハネの黙示録の本論を読むように！と、この言葉はプロローグの最後に置かれて強調されているのでしょう。

私たちは今日の御言葉の前にどうでしょうか。前にこの黙示録は、イエス様の復活後からイエス様が再臨されるまでの全時代の教会とクリスチャンに向かって書かれていると申しました。そういう意味でこの書を最初に受け取った1世紀の教会も、今日の21世紀の私たちも、根本的に同じところにいます。今日の私たちも信仰生活を続けて行く上で色々困難を覚えます。信仰を持ったからと言ってばら色になるわけではありません。つらいこと、苦しいことをなおたくさん経験します。むしろ信仰を持つことでかえって困難な問題にぶつかったりもします。外からも内からも色々な戦いがあります。その中でともすると私たちは意気消沈し、希望を失い、地上ではほどほどでやって行くしかないと諦めて、危険な妥協の道を行こうとする誘惑に駆られるかもしれません。しかしそんな私たちにこの黙示録は天の視点に立つようにと激励してくれています。今日の箇所から、私たちは今日も王の王イエス様に愛されている者たちであることを覚えさせられます。またイエス様の十字架を通して神の王国また祭司とされているという特権的身分に生かされていることを覚えさせられます。そしてこれから将来に素晴らしい究極的な救いの日が来ることを、旧約の言葉をもとにして、もう一度新たな光のもとに示されています。そんなことは起こり得るだろうかと私たちは現実を眺めながら思うかもしれません。しかしダニエル書の幻の通り、そのことは私たちの肉の目に見える現実を打ち破って実現されます。歴史を始めから終わりまで支配している神が必ず実現されます。やがての日、すべての目が、まことの王が栄光の雲とともに来るのを見ることになります。私たちはその日、その方を前にして大いに喜ぶ者でしょうか。それとも嘆き悲しみわめく者でしょうか。この黙示録の言葉に聞いて神の視点に立たせていただき、その究極的な救いの日に向かって、確信を持ちながら、また神とキリストを心から賛

美しながら、神に従う民の歩みを導かれて行きたいと思います。そしてかの日に喜びを持ってまことの王をお迎えし、約束された永遠に続く栄光の御国に入る者の歩みへ導かれて行きたいと思います。